

学位論文題名

# 経済学の研究成果にもとづく歴史教育の内容構成

—しょうゆ醸造業に着目した資本主義的生産の成立過程の指導—

## 学位論文内容の要旨

本論の目標は、自身が歴史の中にある存在であることを学習者が実感できる歴史教育を実現するため、「江戸時代」の経済発展についての研究成果にもとづく教育内容を構成し、授業プランおよびその実践として具体化することによって、学習者の認識形成過程を明らかにすることである。

石井寛治『日本経済史』によれば、封建的社会と位置づけられていた「江戸時代」には、すでに醸造業や繊維業において、資本主義的生産の始まりとされるマニュファクチュアが達成されていた。「江戸時代」の経済発展過程は、17世紀、18世紀、19世紀の3つに区分される。本論ではこの時期区分に依拠しつつ、マニュファクチュアの達成された業種として、しょうゆ醸造業に着目した。しょうゆ醸造業における資本主義的生産の成立過程を通して、「江戸時代」における商品作物栽培の展開を起点とする生産力の発展を軸として、流通・消費の展開を学習する授業プランを作成した。

第1章では、経済学の研究成果にもとづいた歴史教育の方法論を考察するため、教科書記述と歴史教育者協議会の実践を検討した。1986年と1996年検定教科書におけるマニュファクチュアにかんする教科書記述を検討した結果、「マニュファクチュア論争」にみられる、「発展段階」確定の困難さが教科書記述の不明確さの底流にあることが示唆された。また、歴史教育者協議会による経済的関係を基盤にすえた実践を検討した結果、日本史における「地域史と全体像の統一」を構築した北海道歴史教育者協議会による実践集や、教育内容の提案の存在が明らかとなった。これら先行研究と教育実践を踏まえて本論では、生産の増大を中心に「江戸時代」における経済発展過程を明確にすることを目標と定め、第1章の結論とした。

第2章では、第1章で形づくられた理論的枠組みを踏まえ、経済史等における研究成果の教育内容へのとり込みを試みた。この試みの結果、17世紀における量的拡大、18世紀における内包的成長、19世紀における再拡大という、生産の増大を中心とした「江戸時代」の経済発展過程が明確化された。その中でしょうゆ醸造業においては、17世紀に関西地域から江戸への下りしょうゆの販売、18世紀に関東周辺地域における商品作物栽培のひろがりによるしょうゆ醸造業の発展、19世紀に野田・銚子における大量生産の達成がみられた。この過程を学習者が認識するための概念装置として、スミスの『国富論』に依拠しながら市場の形成、貨幣経済の発達、年生産物の増加、大量消費と流通網整備の4点を導き出した。

「江戸時代」の経済発展は17世紀における畿内地域の発展に端を発する。しかし、関東周辺地域におけるしょうゆ醸造業の展開は、18世紀における肥料の投入や農具の改良にみられる農業技術の進歩による商品作物栽培のひろがりを中心としている。この商品作物栽培のひろがりには、しょうゆ醸造に不可欠な大豆・小麦の供給をささえ

るとともに、19世紀における農村市場の形成と貨幣経済の発達を促している。この考察を踏まえ、本論においては、17世紀における下りしょうゆの存在と、19世紀における関東しょうゆによる大量生産達成という2点をはじめに提示する。その後、18世紀における関東周辺地域におけるしょうゆ醸造業の展開の起点となった、商品作物栽培のひろがりについて提示する。この提示の後、19世紀における農村市場の形成と貨幣経済の発達について提示し、関東しょうゆによる資本主義的生産の達成という事実を、農村市場の形成と貨幣経済の発達という点から確認するという教育内容構成を採用した。

第3章では、授業プランの作成、実践及び評価を試みた。まず、第2章で述べた教育内容構成にしたがった問題配列について考察し、授業プラン「しょうゆで考える資本主義的生産の成立」を作成した。第1問では、17世紀の江戸で用いられたしょうゆが下りものであったことを確認するための問いを提示する。次に第2問では、しょうゆ醸造業で資本主義的生産の達成された時期を問う。これら2つの問題を通して、授業プランが17-19世紀の時期を対象とし、生産の発展を主たる内容とすることを明らかにする。そして第3問として、18世紀における農業技術の改善による江戸周辺での商品作物栽培の始まりについて問い、関東周辺地域におけるしょうゆ醸造業の展開の起点を明らかにする。第4問では、野田しょうゆとの競争で遅れをとった銚子しょうゆの売上維持の要因について問い、関東周辺地域における農村市場の形成と貨幣経済の発達という事実を、銚子しょうゆの販売先の変化を通して明らかにする。そして最後に、19世紀初頭の江戸にあったそば店の数を問い、大量消費の具体例から、関東しょうゆによる大量生産の達成を確認する。

問題作成の後、上述の授業プラン「しょうゆで考える資本主義的生産の成立」を実践し、その結果を分析評価した。第3章末部では、授業実践時に学生に書いてもらった感想文をもとに、授業プランの評価をおこなった。この評価をおこなうための前提として、学問としての数学の論理展開にもとづいて感想文評価の枠組みを構築して分析をおこなった須田勝彦と、楽しさの達成といった「一般的評価項目」と「よい問題」の条件を感想文評価の枠組みとして分析をおこなった藤岡信勝による感想文のとり扱いを検討した。これら先行研究を参考にしながら、本論文で述べた授業プランによる授業を評価した。

感想文の分析・検討の結果、授業プランの目標がおおむね達成されたこと、授業が学生にとって楽しいものであったことを確認し、本授業プランが学校現場で実践可能なプランであることを明らかにした。農業技術の発展による土地生産性の上昇が商品作物栽培のひろがりの要因となり、市場の形成や貨幣経済の発展を促したという教育内容にたいして、多くの学生が「江戸時代」の経済発展について新たな認識を形成したことも確認された。しかし一方で、第2問でしめした19世紀における資本主義的生産の達成を、第3問でしめした18世紀における商品作物栽培のひろがりとして理解できなかった学生が多かった。しょうゆの原料となる大豆や小麦などの商品作物に学生の意識が及びにくい発問の方法に、改善の必要が認められた。

本論において採用した、時期区分に即した生産力の発展過程を述べるという研究の方法により、「江戸時代」のしょうゆ醸造業における資本主義的生産の成立過程を、庶民の食生活の変化や農村における貨幣経済の浸透とともに明らかにする教育内容構成と授業プラン作成が可能となった。本論でしめした授業プランは、経済史等の研究成果から導かれた教育内容を、問題、解答、解説の系列によって具体化したものであり、実践の成果をだれもが共有しうるものである。

終章では、授業実践における一定の成果を踏まえた上で果たすべき今後の課題として、「明治」期以降の資本主義確立期におけるしょうゆ醸造業の展開過程の、教育内容としての可能性について考察した。経済史の研究成果からは、「明治」期以降に

おける、しょうゆ醸造家の他業種にたいする資本供給、労働争議の展開、寄生地主制とのかかわりが導き出された。資本主義確立期までのしょうゆ醸造業の展開過程と、同時期における、食生活の変化にみられる消費の展開や、鉄道網の整備にみられる流通の展開との対応も導き出された。これら研究成果にもとづいて、時期区分に即した資本主義確立にいたる生産力の発展過程を、農村市場の展開や労働力の編成過程を含んだ教育内容として述べるのが可能になるとの見通しが立った。これら教育内容の提示や授業プランの作成と実践を踏まえて、現代へいたる資本主義社会の位置づけを明確化する歴史教育の内容と方法についての提言をおこなうことが、筆者の目標とする課題である。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 須 田 勝 彦  
副 査 准教授 大 竹 政 美  
副 査 准教授 大 野 栄 三  
副 査 准教授 前 田 賢 次 (北海道教育大学)

## 学位論文題名

### 経済学の研究成果にもとづく歴史教育の内容構成

#### —しょうゆ醸造業に着目した資本主義的生産の成立過程の指導—

歴史教育が学習者各自の知的関心を呼び起こし、未来を生きる道標となることを多くの実践・研究は求め続けてきた。本研究はそれらの成果に依拠しながら、日本における資本主義的生産が封建社会の内部に芽生える過程を学習課題として設定した。

歴史教育の課題、可能性は限りなく広いが、その大枠は社会構成体とその変動の理解、とりわけ資本主義社会の成立と変貌をテーマとして構成されるだろう。日本においても、日本の歴史教育の目的にそったカリキュラム、単元の構成の開拓が求められている。

本研究の成果は、次の5点に要約できる。第一に、日本における戦後の歴史教育論、及び歴史教育実践を丹念に検討し、歴史教育者協議会、教育科学研究会社会科部会、北海道大学教授学グループなどの成果に共通する視点として生産技術の発展に着目したことである。生産技術は、それぞれの時代に生きる人々が、よりよい生活を求め創意を集積した成果である。日本の封建社会においても米の生産に向けた農業技術の改良が積み重ねられ、他の商品作物の多様な生産と、それに伴う商品経済の発展を可能にしたことが授業で示されている。生産技術の発展への着目は、より進んだ学習段階において、生産関係を理解するための基礎条件となるだろう。

第二に、経済学の研究成果を歴史教育に取り込むことを試み、「江戸時代」と呼ばれる期間の時期区分とその特徴づけを授業で生かすことができたことである。石井寛治は「江戸時代」を農業生産の量的拡大期としての17世紀、土地生産力の上昇に伴う内包的な経済生長期としての18世紀、農村工業、在来産業のいつそうの展開のもとで地方ごとの経済発展が進んだ19世紀、という時期区分をおこなった。本研究はそのような発展過程に照応した形で醸造業におけるマニュファクチュアが実現する過程を示すことに成功している。特に醤油醸造業に焦点化することによって、庶民の食生活の変化、農村の変貌、そばの普及など、生活する人たちの姿へつながる歴史像を思い描くことを可能にしている。

第三に、このような理論構築をふまえて、A) 第一の時期である 17 世紀における下り醤油の存在と、第三の時期である 19 世紀における関東醤油による大量生産の達成、B) 第二の時期である 18 世紀における商品作物栽培の広がりを起点とする関東醤油における大量生産の達成の過程、C) 第三の時期である 19 世紀における市場の形成と貨幣経済の発達、という三つの要素の動的相互関連を考察していく授業を構成しえたことである。

第四に、これら教育内容を学習者への問いかけと、解答・解説の系列（教材構成）として具体化し、実践の成果をだれもが共有できる形において示したことである。今日の教育の状況では、新しい教育内容の構成、教材の構成はきわめて困難となっており、単元を単位とする実践的成果の共有は、教科をこえた価値を有するものと言いうる。

第五に、授業プランに基づく授業がいくつかの大学で実施された。本研究では、若干の改善を続けながら 2007 年に行われた A 大学での 3 コマ（各 90 分）を評価の対象としている。評価は授業実践時に学生に書いてもらった感想文をもとにしたが、その前提として、学問としての数学の論理展開にもとづいて感想文評価の枠組みを構築して分析をおこなった須田勝彦と、楽しさの達成といった「一般的評価項目」と「よい問題」の条件を感想文評価の枠組みとして分析をおこなった藤岡信勝による感想文のとり扱いを検討した。

感想文の分析・検討の結果、授業プランの目標がおおむね達成されたこと、授業が学生にとって楽しいものであったことを確認し、本授業プランが学校現場で実践可能なプランであることを明らかにした。特に、農業技術の発展による土地生産性の上昇が商品作物栽培のひろがりの要因となり、市場の形成や貨幣経済の発展を促したという教育内容にたいして、多くの学生が「江戸時代」の経済発展について新たな認識を形成したことも確認された。しかし一方で、第 2 問でしめした 19 世紀における資本主義的生産の達成を、第 3 問でしめした 18 世紀における商品作物栽培のひろがりとして理解できなかった学生が多かった。しょうゆの原料となる大豆や小麦などの商品作物に学生の意識が及びにくい発問の方法に、改善の必要が認められた。

以上の成果により、著者は北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があると認める。